

小林市野尻町所在

と さ き じ ょ う あ と  
戸 崎 城 跡

国道268号線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

宮崎県埋蔵文化財センター

卷頭図版 1



戸崎城跡遠景(小林市方面を望む)

巻頭図版 2



戸崎城跡全景(宮崎市方面を望む)

## 序

宮崎県教育委員会では、国道 268 号線道路拡幅工事に伴い、小林市野尻町に所在する戸崎城跡の発掘調査を平成 26 年度に実施いたしました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する戸崎城跡は、北・南・東を険峻な崖によって隔てられた要害の地にあって、西方に多くの堀切を配置した中世の山城であります。調査の結果、曲輪や曲輪に伴う道路状遺構、土塁、堀切を検出することができ、それらの遺構に伴う貿易陶磁器類も出土いたしました。

今回の調査で得られた多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 岩切 隆志

## 例　言・凡　例

- 1 本書は、国道 268 号線道路拡幅工事に伴い、平成 26 年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した小林市野尻町に所在する戸崎城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県小林土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
  - 地形測量・基準点・グリッド杭の設置・・・・・・(株) 平和総合技研
  - 空中写真撮影・・・・・・・・・・・・・・・・(有) スカイサーベイ九州
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、遺跡の調査担当者が行った。
- 5 整理作業のうち、遺構と遺物のデジタル製図作業は二方和也が宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 6 出土した陶磁器の分類及び縄張り図の作成については、宮崎県埋蔵文化財センター主幹福田泰典の協力を得た。
- 7 本書で使用したソフトウェアは、デジタルトレースについては Adobe 社 Illustrator(CS6)、遺物写真的加工については Adobe 社 Photoshop(CS6)、原稿の編集については Adobe 社 InDesign(CS6) である。
- 8 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に掲り記述した。
- 9 本書に使用した主な略記号は次の通りである。

SG = 道路状遺構 Gr = グリッド Tr = トレンチ

- 10 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北 (G.N.) を用いた。
- 11 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
- 12 本文の執筆は分担してを行い、第Ⅰ章は二方和也・木場正浩、第Ⅱ章は二方和也、第Ⅲ章は二方和也・福田泰典、第Ⅳ章は二方和也・木場正浩が執筆し、二方和也が編集した。
- 13 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2

### 第Ⅱ章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法と経過	7
第2節 基本層序	9

### 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 戸崎城跡の縄張り	11
第2節 中世の遺構と遺物	12
第3節 近世～近代の遺構と遺物	20

### 第Ⅳ章 総括

第1節 文献史料からみる戸崎城跡	23
第2節 発掘調査成果からみる戸崎城跡	24

報告書抄録	卷末
-------	----

## 挿 図 目 次

第 1 図	野尻町道路分布図	5
第 2 図	戸崎城跡周辺道路分布図	6
第 3 図	地形測量範囲と発掘調査範囲	8
第 4 図	発掘調査範囲 1	8
第 5 図	発掘調査範囲 2	8
第 6 図	遺構分布図と掘削範囲	10
第 7 図	土層断面図	10
第 8 図	戸崎城跡縄張り図	11
第 9 図	土墨土層断面図	12
第 10 図	堀切土層断面図	13
第 11 図	曲輪 C 端部土層断面図	13
第 12 図	道路状遺構分布図	14
第 13 図	1号道路状遺構実測図・土層断面図	14
第 14 図	2・3・4号道路状遺構実測図	15
第 15 図	Tr10・11・12土層断面図	16
第 16 図	5・6・7号道路状遺構実測図	17
第 17 図	調査区北壁・Tr14土層断面図	17
第 18 図	Tr8 土層断面図	18
第 19 図	道路状遺構出土遺物実測図	18
第 20 図	包含層出土遺物実測図	19
第 21 図	近世道路状遺構分布図	21
第 22 図	Tr6 土層断面図	21
第 23 図	壇壝状遺構実測図・土層断面図	22
第 24 図	近世道路状遺構出土遺物実測図	22

## 表 目 次

第 1 表	中世陶磁器觀察表	20
第 2 表	中世土製品・石器計測表	20
第 3 表	近世磁器觀察表	22

## 図 版 目 次

巻頭図版 1	戸崎城跡遠景（小林市方面を望む）	
巻頭図版 2	戸崎城跡全景（宮崎市方面を望む）	
図版 1	曲輪面 Tr 2・5・8・9 土層断面 土墨土層断面 曲輪 C 端部土層断面	27
図版 2	堀切東側全景 堀切東側上部・下部土層断面 堀切西側土層断面	28
図版 3	堀底土層断面 1・2 SG 1・2 完掘状況 Tr10・11・14・調査区北壁土層断面	29
図版 4	壇壝状遺構 壇壝状遺構土層断面 壇壝状遺構完掘状況 SG 出土遺物 包含層出土遺物	30

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道 268 号線は、熊本県水俣市から小林市を経由して宮崎市に至る幹線道路である。現在も地方生活圏を相互に連絡し、人や物流網の一角を担う道路としても知られている。

小林市野尻町松山工区は、交通量が多く、大型車混入率も 16%と高い。周辺 20km 以内には追い越し箇所がなく、無理な追い越しを行い交通事故が発生するなど安全が十分に図られているとは言い難く、危険な状態が続いている。そこで、宮崎県小林土木事務所（以下、土木事務所）では、当該地区に付加車線を設置し、交通安全の向上を図るべく整備を計画することとなった。

ところが、事業予定地の一帯は周知の埋蔵文化財泡蔵地に該当することから、この事業計画に先立つて土木事務所から宮崎県教育府文化財課（以下、文化財課）に対して埋蔵文化財保護に関する協議の申し入れがあった。文化財課では、詳細把握のための確認調査による判断を必要とし、平成 26 年 2 月 20 日に確認調査を実施した。この結果、曲輪や堀切など中世の山城に関連する施設が残っていることや中世の貿易陶磁器などが出土したことから、当該箇所を城域として判断し、発掘調査による記録保存の措置をとることとなった。

### 第2節 調査の組織

発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の体制で実施した。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

【調査機関】 宮崎県埋蔵文化財センター

所長 岩切 隆志

副所長兼総務課長 長津 宗重

総務担当リーダー 副主幹 安藤 忠洋

調査課長 菅付 和樹

調査第一担当リーダー 副主幹 松林 豊樹

(現地調査担当)

調査第一担当 主査 二方 和也

主査 徳田 尚文

調査第二担当 主査 甲斐 貴充

主査 根井 英樹

主査 木場 正浩

(整理作業担当)

調査第一担当 主査 二方 和也

【事業調整】 宮崎県教育府文化財課

主査 二宮 満夫

## 第3節 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

戸崎城跡は、小林市野尻町東麓に所在する。野尻町は宮崎県の地形を北部と南部に大別する加久藤一紙屋凹地帯に位置し、基盤は主として今から約6500万年前から約2400万年前の間に形成された四十万累層群よりなる。北は標高約400mから500mの九州山地につながる山稜で画され、南は隣接する都城市・高原町との境界となる岩瀬川・大淀川に向かって低地が広がる北高南低の地勢を呈す。中央部は、更新世末期の姶良カルデラ形成に伴って大量に噴出された火砕流堆積物である末期の入戸火砕流堆積物が厚く堆積し、平均標高約200mの平坦面（シラス台地面）を形成している。これらシラス台地は小河川の浸食作用によって複雑に入り組んだ丘陵地形を発達させ、急崖をなす谷壁と平坦な谷底による特徴的な景観をみせる。

今回調査の対象となった戸崎城跡は、市街地中心部から東方へ約2km、岩瀬川に向かって突き出た丘陵の端部に位置する。遺跡の一部が国道268号線の整備によって南北に二分された状態になり、調査を行うのは南側の端部のみである。戸崎城跡の標高は約160mであるが、北・東・南の三方は深い谷で囲まれており、南部では一部崩壊し急崖となっている箇所もみられる。岩瀬川との比高差は約40mである。

### 2 歴史的環境

野尻町遺跡詳細分布調査報告書（1994）によると、戸崎城跡が所在する野尻町では、現在までに約200箇所にのぼる遺跡が確認されている。

#### 旧石器時代

野尻町内には、旧石器時代の遺跡が東部の紙屋地区で2箇所確認されており、いずれも姶良Tn火山灰(AT)層直上からの検出である。新村遺跡では、県南西部の諸県地方初となる二側縫加工ナイフ形石器が確認され、その他スクレイパーや多数の剥片も出土している。高山遺跡では、剥片やチップ、炭化物が出土し、さらに赤変した扁平な石の集中部から種群が1基確認されるなど当該地区において人々の生活が営まれていた可能性が指摘される。

#### 縄文時代

野尻町内では縄文時代早期の特徴的な遺跡が多く確認されている。東麓地区の梯遺跡では宮崎県で初例となる集石遺構が23基確認され、その後の県内各地で検出される集石遺構のさきがけとなった。紙屋地区の東城原遺跡では、97点の石器が出土し、東麓地区の天ヶ谷遺跡では円筒形土器のほか姫島産黒曜石が出土するなど、この時期から既に大分県との交流があったことをうかがわせる。また、発掘調査で出土したものとは異なるが、漆野原台地から大正時代前期に縄文時代早期の壺形土器の完形品が出土している。

#### 弥生時代

南西部の河岸段丘上に位置する大荻遺跡では、屋根を葺いていた垂木が炭化したままの状態で残存していた竪穴建物跡や19基の土坑墓が確認されている。土坑墓からはガラス製の小玉560個、貝輪等の副葬品、供獻土器としての長頸壺、二重口縁壺、高杯、器台が出土するなど葬られたのは相当に身分の高い人であったことが推測されている。東部の紙屋城址遺跡では、竪穴建物跡が2軒確認されており、

そのうち1軒は円形を基調とした花弁状住居跡である。その住居内より口縁外面に数条の凹線文を施す瀬戸内系土器も出土している。

#### 古墳時代

野尻町には、野尻村古墳として県史跡指定をうけた東麓地区的九塚古墳、三ヶ野山地区の大萩古墳がある。そのうち南西部の三ヶ野山地区には、5世紀後半から6世紀前半に築造されたと比定されている大萩地下式横穴墓群がみられる。数年にわたる調査の結果、閉塞方法はすべて羨門を閉塞する形式であるが、玄室形態は両袖型平入り寄棟造り・左片袖型平入り切妻造り・両袖型ドーム状方形プラン・左片袖型ドーム状方形プランの四形態が認められ、剣、直刀、刀子、鉄鎌等のほか農耕具・馬具・装身具といった多数の副葬品が出土している。B-2号地下式横穴墓にみられる墓上に埴丘をもつ形態は、この地域の古墳時代の様相を解明していくうえでの貴重な資料とされている。

#### 古代

『延喜式』には古代日向16駅が記載されている。野尻町は西海道のうち日向国から肥後国に向かうルートのひとつである「野後駅」に比定されており、古代より交通の要衝であったことが推測できる。

#### 中世

戸崎城跡周辺の史跡として、国道268号線沿いの光蓮寺バス停付近に制作年代が鎌倉時代後期とされる県指定史跡の東麓石窟がある。薬師摩崖仏ともいい、地元の住民から「岩ん堂薬師さま」と呼ばれ、今でも供花・香煙が絶えない。岩窟は高さ138.5cm・幅185cm・奥行166cmで、仏像は薬師如来を中心に日光・月光両菩薩像を脇侍して、さらに十二神将立像を左右に6体ずつ加えて高浮彫りされている。石仏で十二神将を合祀しているのは珍しく、制作当初の原形をとどめ、損傷もなく、今日まで伝えられてきたことは意義があるものといえる。また築城時期、築城者などは不明だが、少なくとも南北朝動乱期には野尻城が築かれていた。暦応2年(1339年)9月2日付けの日下部盛連軍忠状(軍司文書)によれば、8月17日南朝方の肝付兼重が野尻城に籠城したとある。その後、文明6年(1474年)には、肝付氏一族の系譜をひく北原氏の持城として野尻城の記述がある(都城島津家文書)。戦国期になると野尻城は伊東氏の支配下に入る。伊東四十八城が成立し、紙屋城や今回の調査対象である戸崎城も遅くとも戦国期までは築城されたものと思われる。飫肥や真幸等の宮崎の各地をめぐり抗争していた伊東氏と島津氏だが、元亀3年(1572年)の木崎原合戦において島津氏が勝利すると、均衡していた軍事バランスが崩れた。天正5年(1577年)、野尻城の在地領主である福永丹後守が島津方の兵300余を野尻城へ招き入れ、これを契機に戸崎城も落城した(日向記)。以降、島津氏は南九州を支配する戦国大名になり、伊東氏は大友氏を頼って豊後へ逃亡することになる。

国道268号線沿いの野尻バス停付近に伊集院忠真的墓がある。忠真是島津家の支族で筆頭家老であった伊集院忠棟の嫡男である。父忠棟が島津家当主である島津忠恒によって京都伏見屋敷で暗殺されたことを契機に、慶長4年(1599年)に忠真是庄内の乱を起こした。一進一退の戦いを繰り返したが、慶長五年(1600年)に徳川家康の仲介による和議を受け入れ、忠真是降伏した。慶長7年(1602年)、島津忠恒は徳川家康の命により京にのぼることになる。その際、忠真を供に加え、野尻で鹿狩りを催し、その後忠真を謀殺した。その翌年に建立されたものが伊集院忠真的墓である。この事件の結果として、南北朝から続いた島津氏の内紛や家臣団の抵抗は見られなくなり、島津氏は近世大名として地固めを整え、表高七十七万石の大藩として鹿児島藩が成立することになる。

近世以降

江戸時代になると野尻町一帯は日向国諸県郡の一部として鹿児島藩が支配し、明治維新を迎えることになる。鹿児島藩は独自の支配制度である外城制度によって領国を支配した。この外城による行政区分は近代の市町村成立の母胎となっていることは見逃せない点である。外城という行政区画における野尻には麓・紙屋・三ヶ野山・江平・笛水の5村があり、幕末まで変わらない。

戸崎城周辺の史跡としては、紙屋小学校のプールの横に紙屋閑所跡の石碑がある。紙屋閑所は薩摩8閑所の一つである。寛政の三奇人の人である高山彦九郎の『筑紫日記』や飫肥藩の藩校振徳堂の教授で、のちに家老となった平部嶽南の『六郷荘日誌』にみられるように、鹿児島藩が人および物資の出入りを厳重な統制下においたことが想われる場所である。また、漆野原集落の旧道沿いの水田の中に円形の塚がある。その塚の上に県指定史跡である漆野一里塚の標柱がある。宝永3年(1706年)、鹿児島藩主の島津吉貴が命じてつくらせたもので、江戸幕府巡回検使の巡察や旅行者の便利を図ったものである。

明治期に入ると、西南戦争が起こり、野尻町一帯も戦争に巻き込まれることになる。詳細は『野尻町史』に詳しい。明治16年(1883年)宮崎県の再編により北諸県郡に属し、次いで翌年から西諸県郡に属した。明治22年(1890年)町村制施行により野尻村が成立する。昭和23年(1948年)野尻村・紙屋村に分かれたが、昭和30年(1955年)に合併して野尻町となった。更に平成22年(2010年)3月23日に西に隣接する小林市に編入され、地域自治区「野尻町」となった。

(参考・引用文献)

野尻町史編さん委員会 1994『野尻町史』

宮崎県 1981『土地分類基本調査 野尻』

宮崎県 1989『宮崎県史 資料編 考古1』

宮崎県 1994『宮崎県史 資料編 中世2』

宮崎県 2000『宮崎県史 通史編 近世下』

宮崎県 1999『宮崎県史叢書 日向記』

野尻町教育委員会 1994『野尻町道路詳細分布調査報告書』

野尻町教育委員会 1990『新村遺跡・高山遺跡・東城原1・2・3遺跡 紙屋城址遺跡』野尻町文化財報告書第4集

野尻町教育委員会 1992『天ヶ谷道路』野尻町文化財報告書第5集

宮崎県教育委員会 1984『宮崎県文化財調査報告書』第27集

宮崎県埋蔵文化財センター 2001『本城原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第34集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第209集

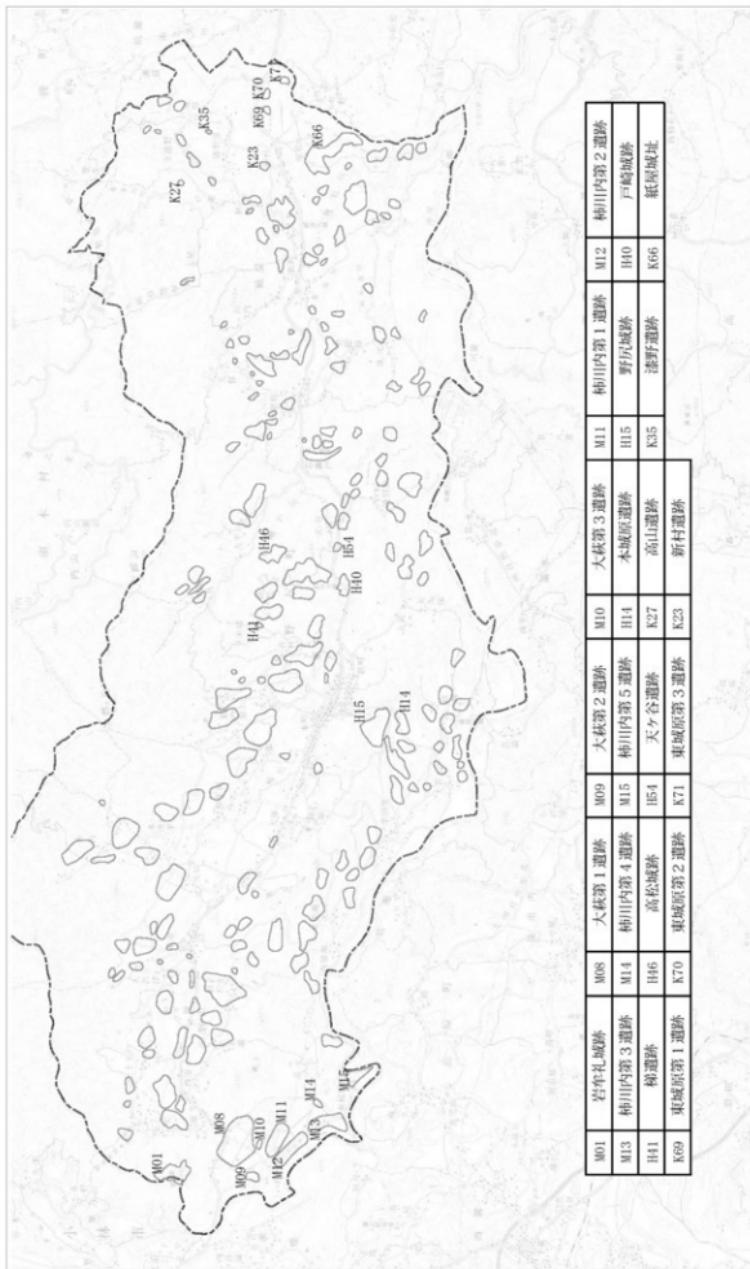
下中弘 1997『日本歴史地名大系46 宮崎県の地名』平凡社

甲斐亮典監修 2007『図説 西諸・北諸の歴史』郷土出版社

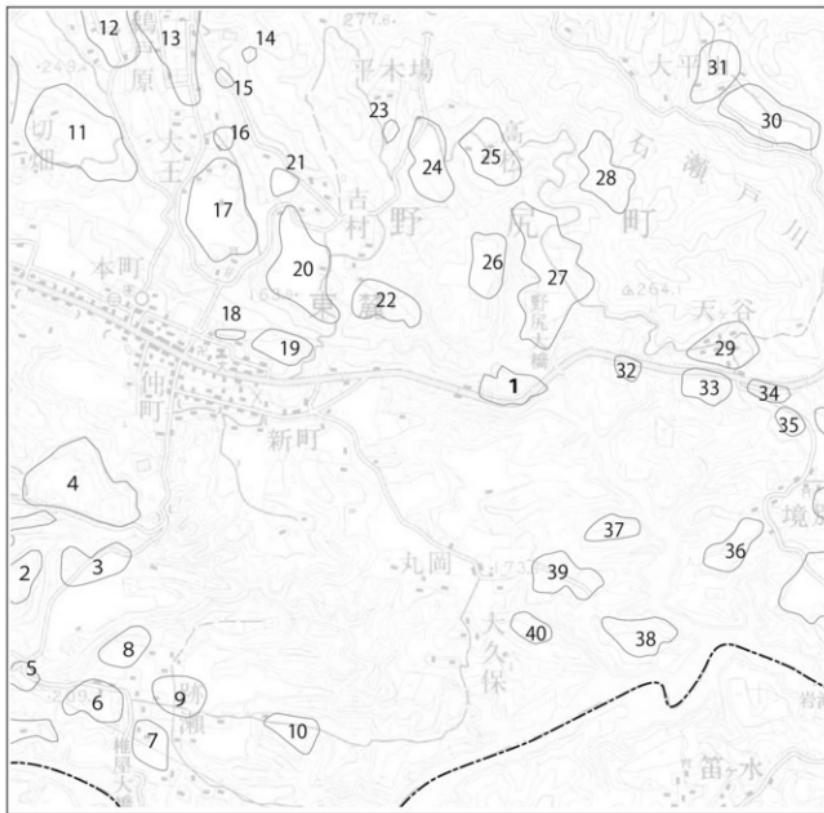
宮崎県高等学校社会科研究会歴史部会編 2006年『歴史散歩45 宮崎県の歴史散歩』図書印刷株式会社

1:40,000  
2km

野尻町遺跡詳細分布調査報告書(1994)を基に作成



第1図 野尻町遺跡分布図



野尻町遺跡詳細分布調査報告書（1994）を基に作成

0  
1/25000  
500m

1	戸崎城跡	2	中須第3遺跡	3	本城原遺跡	4	野尻城跡	5	舟戸第2遺跡	6	東麓上野原第1遺跡
7	東麓上野原第2遺跡	8	東麓上野原第3遺跡	9	東麓上野原第4遺跡	10	跡瀬原遺跡	11	星ヶ平遺跡	12	東麓永山遺跡
13	佐場遺跡	14	平木場第1遺跡	15	大王第1遺跡	16	大王第2遺跡	17	大王第3遺跡	18	崎園第1遺跡
19	崎園第2遺跡	20	奥畠遺跡	21	吉村遺跡	22	堂ヶ迫遺跡	23	梯遺跡	24	平木場第2遺跡
25	伊佐原第1遺跡	26	伊佐原第2遺跡	27	高松遺跡	28	高松城跡	29	一本桙第1遺跡	30	大平山遺跡
31	見越遺跡	32	天ヶ谷遺跡	33	三反遺跡	34	一本桙第2遺跡	35	一本松遺跡	36	境別府第3遺跡
37	東麓丸岡第1遺跡	38	東麓丸岡第2遺跡	39	東麓丸岡第3遺跡	40	名字ヶ瀬遺跡				

第2図 戸崎城跡周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 調査の方法と経過

#### 1-1 発掘調査の方法と経過

本調査以前、戸崎城跡は従前の国道 268 号線整備によって南側が大きく削平された状態にあった。今回の調査区はその南側に位置し、国道整備に伴う切土によって細尾根状に残された部分で、尾根上面には平坦な箇所も認められることから、山城の形状を一部残している可能性が高いと考えられた。そこで、地形の把握のために発掘調査が困難な急傾斜地を含む 2,000 m<sup>2</sup>を調査対象として地形測量を実施した。

発掘調査は、調査区東側の切岸状の地形を呈する部分、中央付近の堀切及びそれに続く東側の曲輪と思われる尾根部分の 2 箇所で実施した。なお、発掘調査を実施した部分については、現況が山林であり、掘削前に樹木の伐採及び搬出を行う必要があった。しかし、樹木の伐採及び搬出を行うためには、地形変更が必要であったため、大きな樹木の伐採を断念し、トレレンチによる遺構・遺物の把握を中心とする発掘調査を実施することになった。調査期間は、平成 26 年 6 月 9 日～平成 26 年 8 月 29 日である。以下、時系列に基づき、調査の経過について述べる。

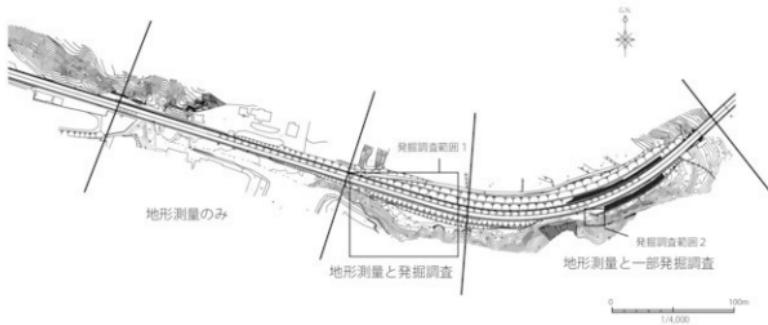
6 月 9 日より堀切と曲輪 C 端部の調査を開始したが、急傾斜であり作業に危険が伴うことから、調査員 5 名によるトレレンチ調査を行った。曲輪 C 端部は、現存で高さが 5 m ほどあり切岸状の成形はみられたが、近代の道路等で上段部分は一部削平されていた。南北に横断する堀切は、堀幅約 16 m、深さ約 11 m あり、堀底はシラスを大きく掘り込んでいたが、全てを確認するまでには至らなかった。

7 月 14 日から作業員の雇用を開始した。現存する曲輪上面の細枝や落ち葉の除去を行い、曲輪の形状が明瞭になったところでトレレンチを 7 本設定し、堆積状況等を確認した。表土から約 70 cm のところで整地されたような面がみられ、大木の木根の影響をうけない範囲を掘り下げていった。白磁や青磁、青花、国産陶器等の遺物が出土している。曲輪西側では、曲輪面で一部混潤土がみられ、混潤土を取り除くと硬化面が確認できた。

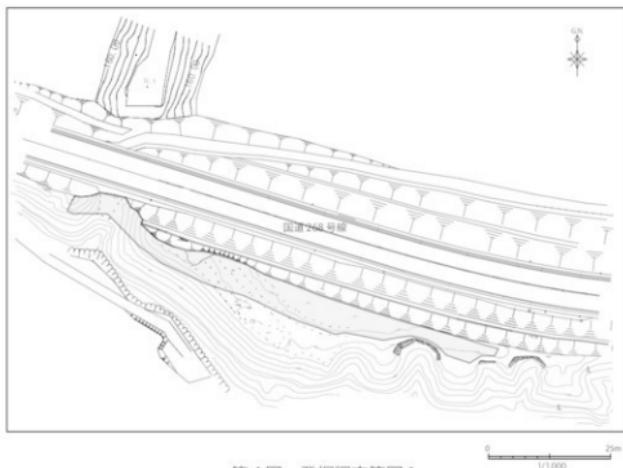
7 月 24 日より曲輪以外の平坦面に新たに 5 本のトレレンチ設定し、遺構の確認を行った。東側の平坦面、西側の切り通し状にくぼんだ平坦面ともに硬化層が数層みられ、補修を繰り返しながら道路として機能していた様子がうかがえた。東側の最下面の硬化面からは、地山に掘り込むようなかたちで波板状凹面が確認でき、西側でも一部ではあるが確認できている。また、西側にあるトレレンチの断面からは、シラス混じりの層がみられた。現地形の様相からも、これらを利用して土塁が築かれたと考えられる。

8 月 12 日より転塙状遺構の掘削を開始した。転塙状遺構は、土塁として盛られた盛土の法面に掘り込むかたちで作られており、規模は縱横ともに 3 m 以上である。遺物の確認はできなかった。

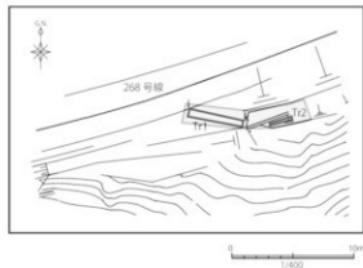
調査区全体を通して、曲輪、堀切、道路状遺構、土塁、転塙状遺構を確認し、遺物は主に中世の陶磁器が出土した。遺物については、トータルステーションで出土位置を記録し取り上げた。適宜、実測図化作業、写真撮影による記録作業を行った。なお、空中写真撮影については、業務委託により 8 月 26 日から撮影を行った。8 月 29 日で発掘調査の全てを終了した。



第3図 地形測量範囲と発掘調査範囲



第4図 発掘調査範囲1



第5図 発掘調査範囲2

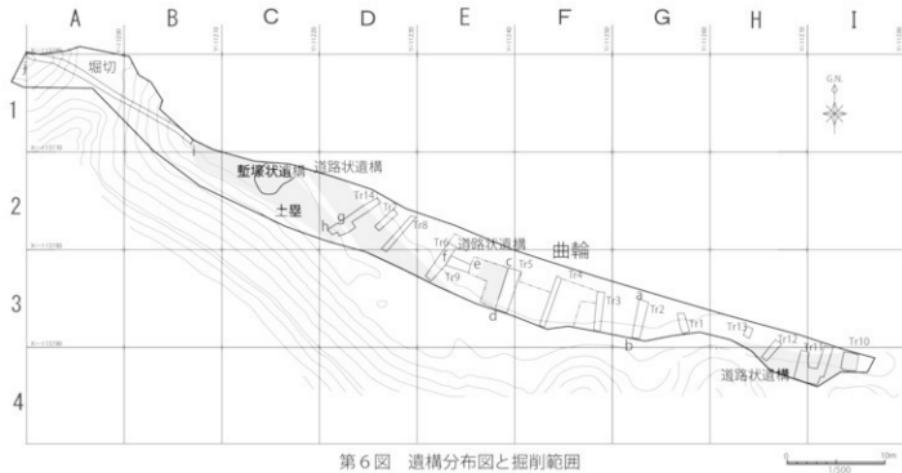
## 1-2 整理作業及び報告書作成

現地での調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センターに持ち帰り、平成26年9月～12月の期間で整理作業を行った。水洗、注記、選別、計測等の作業後、遺物台帳を作成した。その後、平成26年10月より遺物実測作業に入り、写真撮影を行った。遺物実測図及び現場実測図はデジタルトレース作業を経て、レイアウトを行った。報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査マニュアル「整理作業・報告書作成編」に則って作成した。

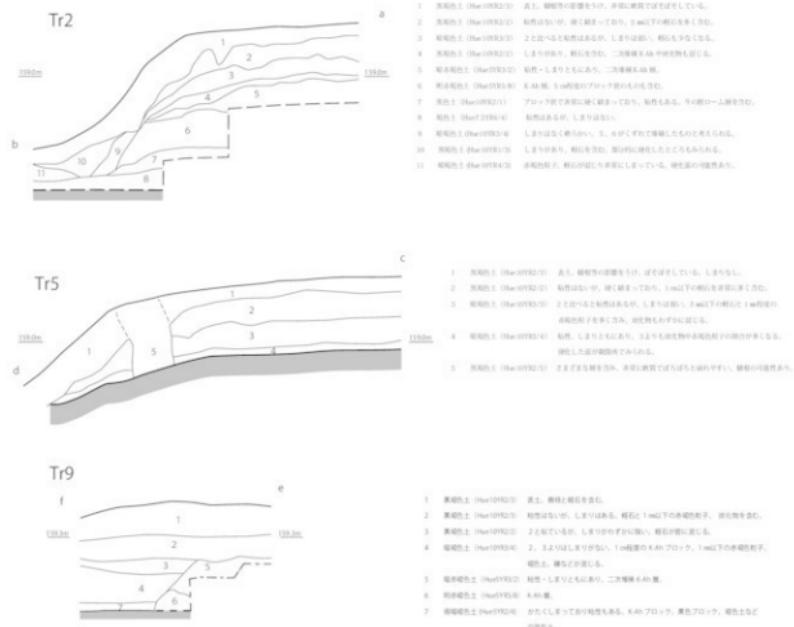
## 第2節 基本層序

本調査区は、第1節でも述べたとおり、国道整備による切土の影響で、一部山城の遺構が残された細尾根状の範囲である。北面は道路によって切り取られ、南面は急崖となっており、崩壊した箇所もみられるなど、起伏のある東西に細長い地形となっている。基本層序を設定するにあたっては、Ⅷ層から上は曲輪に設定したトレンチに基づいて検討を行い、それ以下の層については、堀切の土層堆積状況に基づいて検討を行った。それぞれの土層断面の様相については、各トレンチの土層断面を参照されたい。土層は色調、土質によりI～IX層に分層した。以下、基本層序の詳細である。

I層	黒褐色土層 (Hue10YR2/3)	樹根を多く含み、やわらかい。
II層	黒褐色土層 (Hue10YR2/2)	粘性はないが、硬くしまっている。1mm～5mm程度の軽石を多く含む。
III a層	暗褐色土層 (Hue10YR3/3)	粘性はあるが、しまりは弱い。1mm～5mm程度の軽石と1mm程度の赤褐色粒子を含む。
III b層	暗褐色土層 (Hue10YR3/4)	III a層と比べるとしまりはある。軽石、赤褐色粒子とともに炭化物を多く含む。場所によっては硬化した面もみられる。
IV層	暗赤褐色土層 (Hue5YR3/2)	二次堆積の鬼界アカホヤ火山灰層。粘性・しまりともにあり。
V層	明赤褐色土層 (Hue5YR5/8)	鬼界アカホヤ火山灰(以下、K-Ah)層。良好な状態で堆積している。
VI層	黒色土層 (Hue10YR2/1)	大きなブロック状で、非常に硬くしまっている。
VII層	褐色土層 (Hue10YR4/6)	粘性はあるが、しまりはない。
VIII層	にぶい黄褐色土層 (Hue10YR4/3)	大きなブロック状で非常に硬くしまっている。1mm程度の橙色ブロック、2mm程度の灰白色粒子、白色粒子、小林軽石(以下、Kr-Kb)を含む。
IX層	褐灰色土層 (Hue7.5YR6/1)	上層はしまりがあまりないが、下層にいくにつれ非常に硬くしまる。わずかに5cm程度の灰白色的軽石を含む。入戸火砕流堆植物(シラス層)。



第6図 遺構分布図と掘削範囲



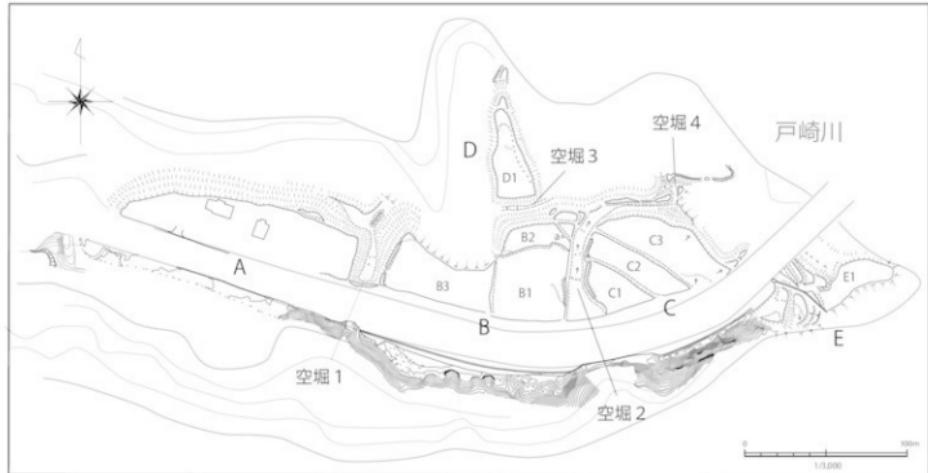
第7図 土層断面図

## 第三章 調査の記録

### 第1節 戸崎城跡の縄張り

城跡は野尻湖に突出する舌状の丘陵上に城取りされている。しかし、この景観は昭和39年に開始された大淀川総合開発事業の一環である岩瀬ダムの建設により出現したダム湖が作り出したものである。また、国道268号線が城跡を東西に貫通したことにより、従事の景観は大きく改変されている。城地となった台地縁辺部は、岩瀬川支流の戸崎川の浸食が生み出した深い谷地形や解析谷に囲まれており、西側を除く3面が急崖をなし城地としては好地である。

城の縄張りとしては、大きく5区(第8図、A～E区)の曲輪群に分けて考えることができる。主郭と目される曲輪B1は、東、西、北の3面を大規模な空堀で遮断し独立性を高め、東西端部には土塁を設ける。西側の土塁は残存状況が良好であり、空堀1と相まって西方向からの侵入に対する強い防備の意識が見て取れる。また、D区と対峙する曲輪B2からは、B区の東側からC区の北側へと巡る空堀2の内部空間をつぶさに見て取れる。空堀2が大きく東へと屈曲する北東隅角付近に配置された4つの曲輪は、曲輪B2端部の虎口状遺構(a)へと連絡する意図をもって配置されたと考えられる。C区は切岸により3つに区画され、曲輪C1と曲輪C2の西端部に土塁を設ける。また、曲輪C3の北側斜面は切岸により急崖となし防備を固めるが、平坦面は周縁部に向かい緩やかに傾斜し、端部処理が曖昧となる。空堀3によりB区から断ち切られたD区には、土塁等の明確な防衛のための施設は見いだせない。しかし、この尾根筋からの侵入ルートは容易に想定され、空堀3やC区北側の空堀4はそのルートを断つ意図があると考えられる。E区は城域の東端に位置し、隣接するC区と比べ約20mの比高差を有する。レベル的には劣るが、丘陵東端部から東に伸延する尾根筋を見通す位置にあること、一定面積を有する曲輪E1の存在等から東方向からの侵入に対する防備を固める意図が汲み取れる。A区は空堀1の西側に位置し最大面積を有する。現状は宅地となっているが、その西側2箇所で空堀の痕跡を確認できる。西からの侵入に対し、複数の空堀で台地から城域を切り離していた状況が見て取れる。



第8図 戸崎城跡縄張り図

## 第2節 中世の遺構と遺物

### 2-1 曲輪（第6・7・8・12・13図、図版1・3）

調査対象である曲輪は、戸崎城跡全体でみると城域の南端にあたり、その南側には曲輪に沿って幅5m程の切り通し状の平坦面があり、その先は土塁と谷に向かう急崖となっている。国道268号線で分断されているため、本来の曲輪の形状は不明瞭である。平坦面は、曲輪B3に属すると考えられ、長軸が東西方向に約35m、短軸が南北方向に約6mあり、周囲約73.16m、面積約141.46m<sup>2</sup>、標高は約159.0mを測る。曲輪に設定した土層断面観察から、二次堆積K-Ah層上面を変更、整地を行い、平坦面を造成していると思われる。平坦面には一部踏み固められたような硬化面もみられた。E3グリッドでは、曲輪の造成面と考えられるレベルに黒褐色土や赤褐色粒子、軽石を含む混潤土が確認できた。混潤土を取り除くと、本来の地形は南西に向かい緩やかに下り、床面には部分的に硬化面がみられ、曲輪の平坦面と同時期の遺物も出土している。曲輪内の連絡通路として利用していたものを改変し、曲輪を拡張したとも想定される。遺物は、白磁、青磁、青花といった貿易陶磁器ほか、土師皿、備前系の瓶や甕が出土している。

### 2-2 土塁（第6・8・9図、図版1）

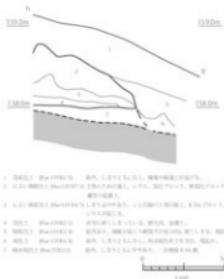
土塁は、曲輪B3の南西部（B1グリッド～D2グリッド）に位置し、南側の急崖の谷に沿うように築かれたものと思われる。土塁は、高さ70cm～80cmのシラスを多く含む土層で構築されていた。盛土は構築時に堅く締められていたと推測されるが、現在は樹根等の影響をうけしまりが弱くなっている。また、盛土のシラス混じり層と下層の地山層との間には黒色ブロックやK-Ahブロックを含む10cm程度の固く締まつた層がみられた。土塁の規模は、現況で約20mであるが、土塁は調査対象区外まで延びており、実際の規模は、曲輪B3西側にみられる土塁までおよぶものと考えられる。

### 2-3 堀切（第6・8・10図、図版2・3）

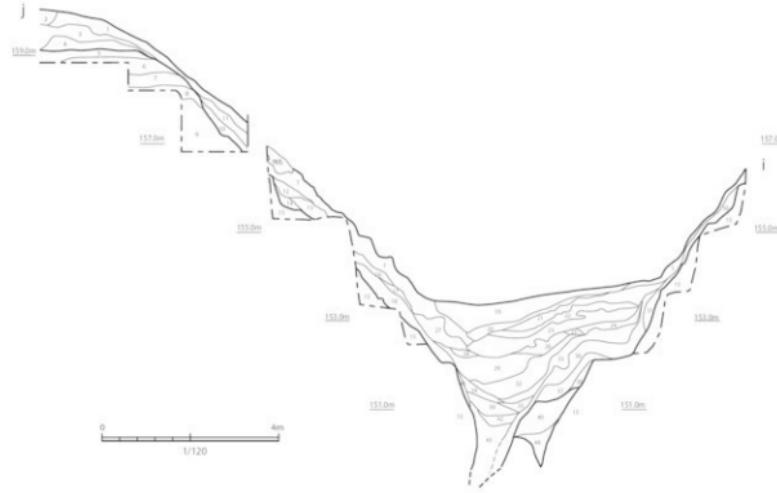
堀切は、曲輪Aと曲輪Bを南北方向に分断する形で設けられている。堀切の北側は調査対象区外のため正確な長さは不明ではあるが、N-17°～E方向に開削され推定60mである。堀底は現在の道路面より非常に深かったため、安全が確保できる掘削可能な深さまで掘り下げ、遺構規模の把握に努めた。掘削範囲での堀切の堀幅は約16m、深さ約11m、法面の角度は約50°を測る。土層断面観察より、二次堆積K-Ah層上面から加工を施し、標高152.2m付近で一度平坦面を作り出した後、底部はシラス層をV字状に掘り込んだ薬研の形状であったと考えられる。さらに、堀底より西側には、薬研状に掘り直した様相がみてとれ、そこを埋め固めたような跡も確認できた。遺物の出土がなく、時期差については不明ではあるが、薬研状に掘った堀底を、後に大きく改変したことが推測される。

### 2-4 曲輪C端部（第5・8・11図、図版1）

曲輪C端部は、曲輪Bとは谷を挟んだ調査範囲2（第3・5図）に位置する。土層堆積の様相が調査範囲1（第3・4図）とは大きく異なる。基本的には南側の谷に向かい傾斜して堆積しているが、下

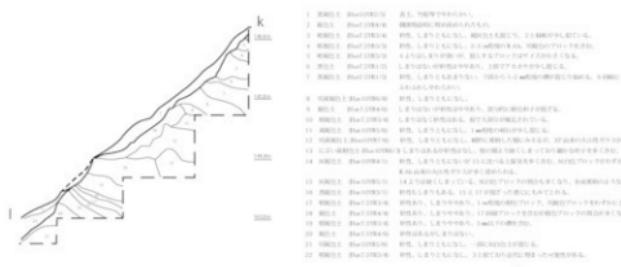


第9図 土塁土層断面図



1. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性、しまりともになし。細胞や網状が目立つ。(暗黄色)  
2. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/5* 和性、細胞なし。シラス多く含み、土質の弱さか。  
3. 棕褐色土・*Bhei5/YV3/40* しまり、和性あり。1-3cm K-Alブロック、崩落ブロック  
まれる鉢巻、赤褐色の子孫が多く。  
4. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/2* しまりあり、和性ともややあり。わざと赤褐色土。細胞子含む。  
5. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/3* しまりあり、和性あり。わざと赤褐色土。細胞子含む。  
6. 明褐色土・*Bhei5/YV3/5* 和性、細胞子含む。和性は確認できない。  
7. 黄褐色土・*Bhei5/YV2/0* 大きなブロック状で非常にくしゃくしゃしている。下の地を削む。  
8. 棕褐色土・*Bhei5/YV4/40* ゆららかが和性地である。  
9. にじく黄褐色土・*Bhei5/YV4/40* 大きなブロック状で削落に弱い。1m程度の粗ブロックや2m程度の块状。  
10. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/4* 細胞子含む。K-Alを含む細胞。  
11. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/3* 10cm程度の塊状で、やや細胞子含む。  
12. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/3* 10cm程度の塊状で、やや細胞子含む。  
13. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/3* 10cm程度の塊状で、やや細胞子含む。  
14. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/5* しまりなくやや細胞子含む。  
15. 黄褐色土・*Bhei5/YV6/0* ゆららかが和性地である。わずかに1-3cm赤褐色の細粒を含む。  
16. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/7* 下層の細胞子含む。1.3と細胞子を含む。  
17. 棕褐色土・*Bhei5/YV4/0* しまりがなくやや細胞子含む。表土が少し茶色。  
18. にじく黄褐色土・*Bhei5/YV4/0* しまり、和性ともなし。ボロボロしてやわらかい。  
19. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/40* 1cm、厚さ約1cmの細粒地である。(暗黄色)  
20. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/40* しまりなし。和性あり。3-20cmの塊状地のブロックが混じる。  
21. 黄褐色土・*Bhei5/YV8/0* 和性、しまりともなくやや粗い。黄色地のブロック、鐵、シラスなど  
が混じる。
22. にじく黄褐色土・*Bhei5/YV4/40* 塗装地の和性地がわざかではあるが、K-Al、細胞のブロック、21を含む。  
23. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/0* 21に近似しているが、2cm程細いブロック、5cm程粗いブロックなど混じる。  
24. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/1* 色は同じくしまりあり。白い鉢巻、細胞子含む。  
25. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* しまりしてており、白い鉢巻、細胞子含む。  
26. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/1* 和性はなしかも含むやや赤み。1m以下の塊状、細胞子含む。  
27. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性のよう地の和性地がある。  
28. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 27と29に似る。K-Alブロック、3m以上の和性子を含む。  
29. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* シラス、細胞子、鉢巻地土、鐵、K-Alブロックなどが混じた地。  
30. 浅褐色土・*Bhei5/YV4/0* 和性、しまりともなく細い、シラスも混じる。  
31. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/0* 和性、しまりともなく細い。シラスと蟲の足跡が混じる。  
32. 黄褐色土・*Bhei5/YV4/0* 30と似ていて、5-10cmの細い塊状地の和性地のブロックを含む。  
33. 黄褐色土・*Bhei5/YV2/0* 和性地はあるがまだまではない。  
34. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性、しまりともあり。白い鉢巻、細胞子含むやかに含む。  
35. 黄褐色土・*Bhei5/YV2/0* 33と似ていて、より多くの10cm以上の和性子の和性地を含む。  
36. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性、しまりともなく細い。細胞子、K-Al、鉢巻地土、鐵、黄褐色のブロックを含む。  
37. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性、しまりともなく細い。細胞子、鉢巻地土、鐵、K-Al、黄褐色のブロックを含む。  
38. G.C.の削落土・*Bhei5/YV4/0* 1.6m以上削れていて、3mのK-Alを含む地。  
39. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* けげるシラスがあり、1m以下の和性子を含む地。鉢巻地土を認める。  
40. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 和性地としている。サリコのK-Al、細胞のブロックを多く含む。サリコは土を含む和性地のブロック、鉢巻地のブロックを含む。埋められた可燃性地。
41. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 40と似ていてが、シラスが混じる。  
42. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 常に削れていている。明褐色のブロック、2m以下の和性地の子を含む。  
43. 黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* 39と似ていてが、より明るい。2m程の和性の子を含む地。  
44. にじく黄褐色土・*Bhei5/YV3/0* しまりあり。和性土。シラスがまばらに見られ入地に埋められた和性地が認られる。

第 10 図 堀切土層断面図



第 11 図 曲輪 C 端部土層断面図

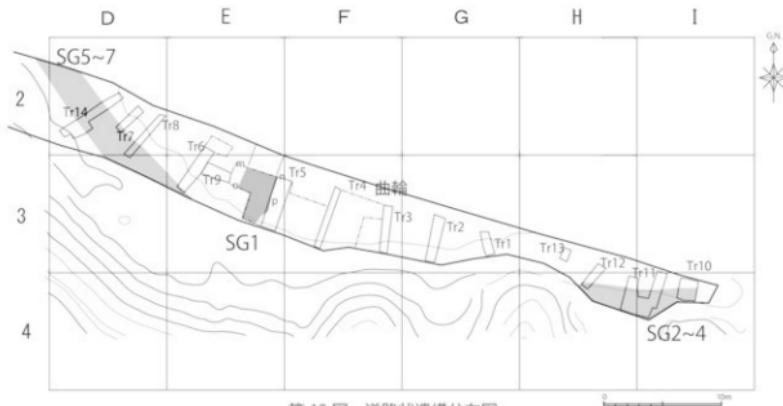
層では K-Ah に含まれる火山性ガラスと始良 Tn 火山灰に含まれる火山性ガラスが交互に堆積する箇所があるなど、以前に自然の大規模な地形変化があったことがうかがえた。

曲輪 C 端部は、現存で高さ約 5 m、法面の角度は約 40°である。上方の曲輪は、崩落や近代の道路で削平されており、わずかに細尾根状に残っているだけであった。切岸状の成形の跡は確認できたが、遺物の確認はできなかった。

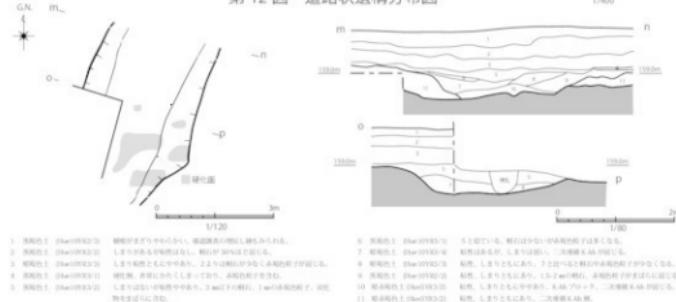
## 2-5 道路状遺構（第 12 図～第 18 国、図版 3）

### （1）1号道路状遺構（SG1、第 12・13 図）

E3 グリッドに位置し、二次堆積 K-Ah 層上面にある曲輪の平坦面で検出した。埋土はしまりが弱く、主に軽石や赤褐色粒子を含む黒褐色土である。走行軸を N-20° E にとり、南に向かって下る。確認された範囲での規模は、長さ約 4.5 m、最大幅約 3 m、南側と北側の比高差は約 0.6 m、調査区外に向かってそれぞれ南北に延びていくものと考えられる。南側では、硬化した面が部分的ではあるが、認められた。また、硬化面付近からは、青磁碗、青花の碗・皿、備前系の瓶、その他、小片の土器が数点出土した。曲輪から出土した遺物と同一個体のものも認められることから、曲輪と同時期に曲輪内の連絡通路として利用されていた可能性がうかがえる。



第 12 図 道路状遺構分布図

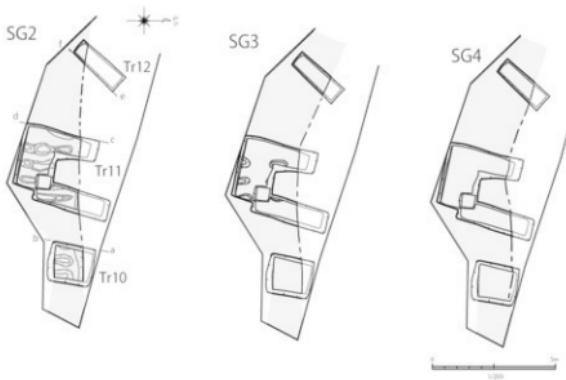


第 13 図 1号道路状遺構実測図・土層断面図

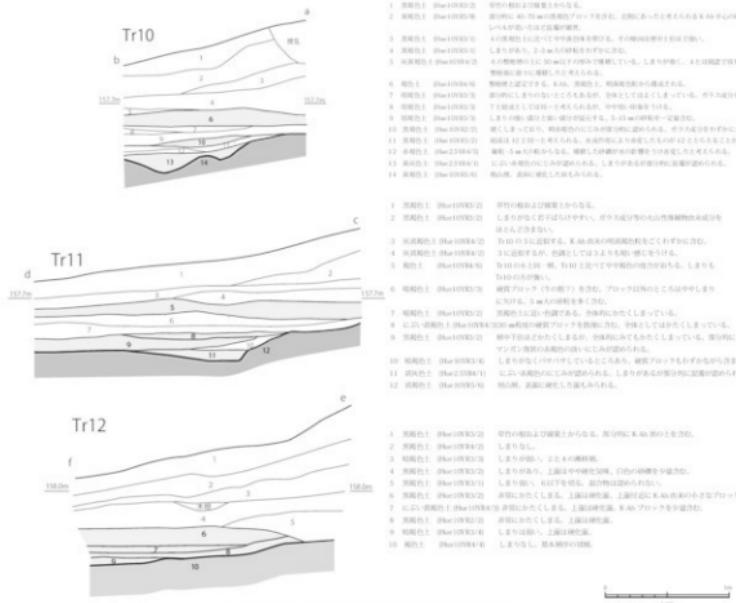
(2) 2・3・4号道路状遺構 (SG2～4、第12・14・15図)

曲輪の東側、H4グリッド～I4グリッドに位置するTr10・11・12内で確認した。土層断面観察から、近い時期に何度も踏み固められ利用されていた様相がみてとれ、隣接するトレンチの位置関係と硬化層の状態から、少なくとも4回の改変が想定される。ただし、近い時期で利用されたこともあり、各硬化層内でも土層により数層に細別することもできる。また、最上面の硬化層を検出したSG8は、遺物の出土状況等から判断して近世の所産と考えられることから、詳細は第3節で述べる。SG2・3・4は、ほぼ同方向・同範囲に形成されており、主軸は東西方向に向け調査区外へ延びていくものと考えられる。

SG2は、標高157.2m付近のKr-Kbを含むⅥ層またはⅦ層に掘り込む形で硬化面が認められた。Tr10・11の底面においては、平面形が不整な楕円形状の連続するくぼみ、いわゆる波板状凹凸面を確認した。波板状凹凸面は、樹木等で掘削範囲が制限されたため、途切れる箇所があるものの、くぼみとくぼみとの芯心距離は60～70cm程度で、深さは5～10cm程度である。埋土は砂質土が強く硬くしまっており、道路を補修した際の造成土とも考えられる。SG3は、標高157.3m付近でSG2との間に自然堆積した層が認められないことから、ほぼ同時期にSG2を補修し利用されたものと考えられる。Tr10・12は土層断面のみの確認となったが、Tr11ではSG2同様の波板状凹凸面が確認された。波板状凹凸面のくぼみは、平均70cm程度の間隔で連続しており、深さは3～5cmとSG2と比べるとやや浅めである。南側にある3つのくぼみは、SG2のくぼみ上もしくはSG2を切る関係にある。北側のくぼみの埋土は、南側のくぼみよりもやや明るく砂粒を含み、周囲の硬化面との硬化度が明らかに異なり軟質であるが、南側のくぼみとほぼ等間隔で並んでいる。SG4は下層の硬化面のような波板状凹凸面はもたず、黒褐色土混じりの比較的平坦な面である。遺物は、青花碗、備前系の描鉢が出土している。



第14図 2・3・4号道路状遺構実測図



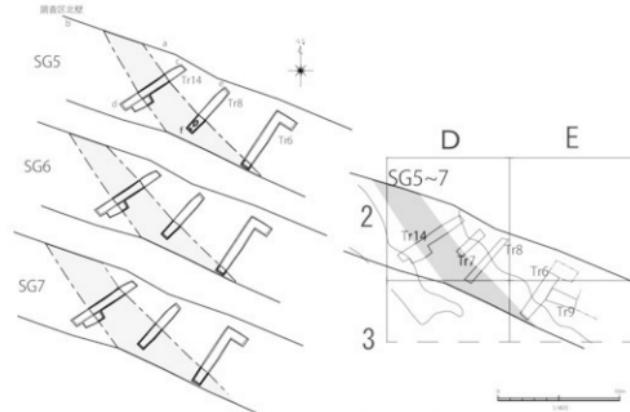
第15図 Tr10・11・12 土層断面図

### (3) 5・6・7号道路状遺構 (SG5～7、第16～18図)

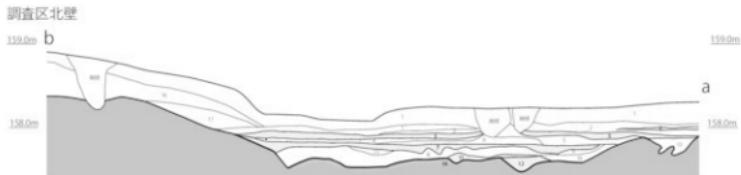
曲輪の西側、D2 グリッド、D3 グリッド、E3 グリッドの切り通し状にくぼんだ地形に位置し、Tr6、Tr8、Tr14、調査区北壁で確認した。SG2-4 同様、4 回の改変や近い時期に利用されていた様相がみてとれる。最上面の硬化面 (SG9) は近世の所産として考えられることから、詳細は第3節で述べる。確認された範囲での SG5-7 は、主軸を N-35°W に向け、長さ約 15 m、幅約 2.2-2.5 m で曲輪の縁辺に沿うように延びている。ただし、遺構の南端は、調査区外にまで及ぶことと Tr14 の攪乱により正確な位置が確認できなかったため、調査区北壁の土層断面から判断した推定幅としている。

SG5 は、標高 157.6 m 付近にⅧ層を掘り込むかたちで検出し、曲輪面との比高差は約 1.7 m である。Tr8 では、波板状凹凸面が確認され、埋土は下部あたりににぶい赤褐色のじみがみられる非常に硬くしまった黄灰色土である。他のトレンチ内からは波板状凹凸面は確認できなかったが、検出状況や埋土の状況から SG2 と同じように連続して存在していたと想定できる。SG6 は、SG5 のくぼみを埋め、硬化面を作り出しており、自然堆積層も含まれないことから、ほぼ同時期に存在し、SG5 の補修を繰り返しながら利用していたと考えられる。SG7 は、SG6 の間に黒褐色土の疊混じりの層をはさみ平坦な硬化面を形成しており、比較的連続した時期での利用の可能性がうかがえる。遺物は、青花の碗や皿、小片ではあるが国産の陶器も出土している。

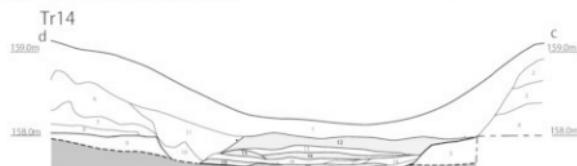
SG2-7 は調査区の関係上、分断されて検出しているが、SG2 と SG5、SG3 と SG6、SG4 と SG7 は検出状況や埋土の様子などから互いが接続して存在していたと考えられる。



第16図 5・6・7号道路状遺構実測図



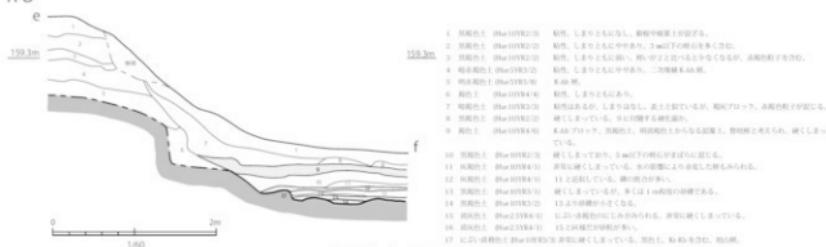
1. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 粘性、しまりともなし。堆積した砂礫からなる層。下部に赤色をしたところもある。  
2. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 上部は砂質の層があり、下部は粘土質の層。  
3. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 表面は被覆しておらず、赤色の土成層のようなものみられる。  
4. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 表面は被覆しておらず、KAb、黒鉛土、堆積土などの層と重複。  
5. 堆積土 *Blue/0TR2/30* 黏性あり、少しやや重く、3cm以下で最も。  
6. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。堆積した砂礫層がみられる。  
7. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性ありしてしまっており、赤色の土成層層がみられる。底層土。  
8. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。薄い土成層層がみられない。
9. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 堆積した砂礫からなる層。下部に赤色をしたところもある。  
10. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性、しまりともなし。堆積土、黑色ブロックが見れる。  
11. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 表面は被覆しておらず、赤色の土成層のようなものみられる。表面は被覆してしまっている。Tr14の20と100。  
12. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性あり、しまりやや重く。黑色ブロック。表面は被覆しておらず、  
13. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性あり、しまりなし。表面は被覆しておらず、地表に隣接する。  
14. なし。堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性ありしてしまっており、KAbを含む。地表。
15. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性ありしてしまっており、KAbを含む。地表。
16. なし。堆積土 *Blue/0TR3/30* 上部より被覆してあるが、堆積土層にはない。
17. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 堆積した砂礫土であるが、わずかにシラスも混じる。



1. 堆積土 *Blue/0TR2/30* 粘性、しまりともなし。堆積した砂礫土である。  
2. なし。堆積土 *Blue/0TR2/30* しまりともなし。土成層の表面層がブロックを含む二層構造を示す。  
3. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 建築ブロックが多く含み、どうして被覆している。  
4. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 粘性、しまりともなし。1m以上の高さのブロック、黑色ブロックを含む。  
5. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 土と近似する。表面は被覆した砂礫層がみられる。  
6. なし。堆積土 *Blue/0TR2/30* しまりともなし。シラス、黑色ブロック、黑色のブロック、砂礫の層など。  
7. なし。堆積土 *Blue/0TR3/30* しまりともなし。6cmの厚さの砂礫土。KAbブロック、シラスの層など。  
8. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。表面は被覆した砂礫層。  
9. 堆積土 *Blue/0TR4/10* 黏性、しまりともなし。堆積した砂礫土である。  
10. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。表面は被覆した砂礫土である。堆積土を含む。
11. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。表面は被覆した砂礫土である。堆積土を含む。
12. 堆積土 *Blue/0TR3/30* KAb、黒鉛土、表面は小さな岩層。堆積土を含む。被覆してしまっており、堆積土を含む。
13. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。2m程度の厚さを有する。
14. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。砂の表面にのみ赤色をしたものみられる。
15. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。1m程度の厚さ。シラスが混じる。
16. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 1m以下の厚さの砂礫層。下部は表面層の砂礫層による層をなす。
17. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性、しまりともなし。1m程度の厚さを有する。
18. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 1mの厚さでしてあるが、堆積土を含む。
19. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。砂の表面にのみ赤色をしたものみられる。
20. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。砂の表面にのみ赤色をしたものみられる。
21. 堆積土 *Blue/0TR3/30* 黏性ありしてしまっている。表面は被覆しておらず、地表に隣接する。

第17図 調査区北壁・Tr14 土層断面図

Tr8

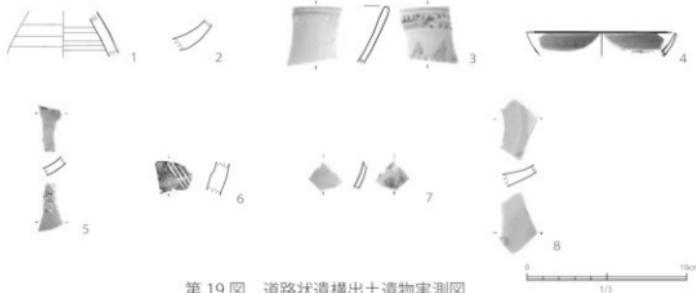


第18図 Tr8 土層断面図

## (4) 遺構出土遺物 (第19図、図版4)

国産陶器3点、青磁1点、青花9点の計13点出土し、そのうち8点を図化した。1～5はSG1から、6・7はSG2から、8はSG3からの出土である。

1は備前系の徳利型瓶の胴部である。曲輪から出土した12・13と同一個体である。2は青磁碗である。底部から丸みをもつて口縁部に延びる。3は青花碗である。口縁部外面に波濤文帯、その下に芭蕉葉文を描く。口縁部内面には2条の界線が認められる。4・5は青花の皿で、底部は甚苟底を呈すると考えられる。4は口縁外面部に波濤文帯を描く。5の底部は熔着した砂が認められる。6は備前系擂鉢の胴部であり、少なくとも3条の描目が確認できる。7は青花碗である。体部外面に草花文を施す。8は底部が甚苟底を呈すると考えられる青花皿である。見込に2条の圈線を施す。この他、図化していないがTr11のSG2からは陶器片が、Tr8のSG7からは青花碗の小片が出土している。



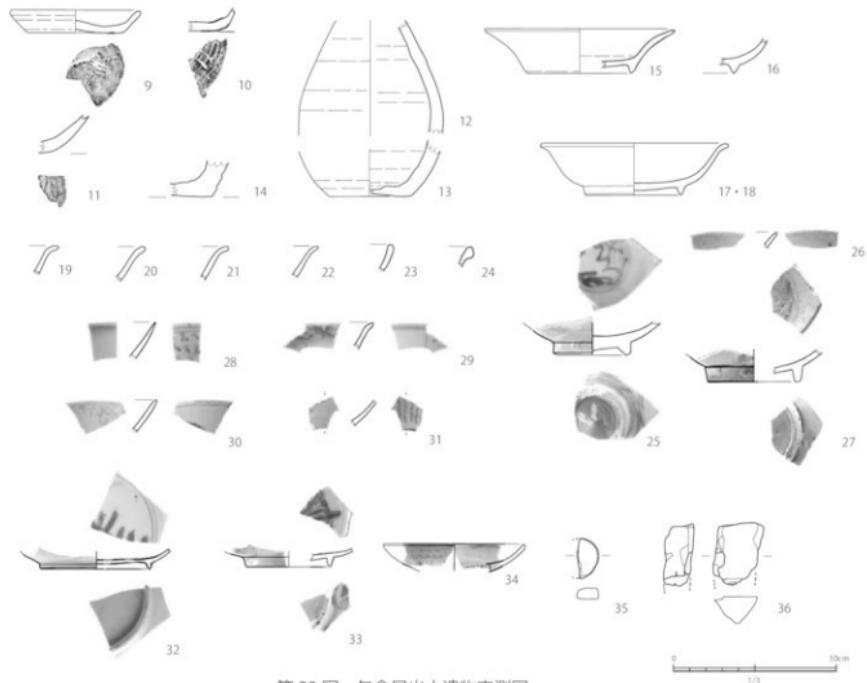
第19図 道路状遺構出土遺物実測図

## 2-6 包含層出土遺物 (第20図、図版4)

土師器23点、国産陶器10点、白磁13点、青磁1点、青花15点、土製品1点、砥石1点の計64点出土したが、文様や形状が不明瞭であり器種を特定できるものも少ないため28点を図化した。

9～11は土師器の皿である。回転台からの切り離しは、すべてヘラ切りである。12・13は備前系の徳利型瓶である。底部から胴部にかけて膨らみをもち、口縁部にかけてすぼまる形状を呈する。14は備前系の甕の底部である。外面の底部から体部への変化点直上に2条の沈線を施す。15～23は白磁皿である。15は胎土が概して精緻であり、底部付近から緩やかに外反し、口縁部は端反る。高台甕付付近まで釉を施す。16は体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。高台の断面は三角形を呈する。

17・18は体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。口縁部は丸くまとめ端反りとなる。高台付のみ露胎とし、底部には意図的な削痕が認められる。19～22は口縁部が端反り、23はやや内湾気味の口縁部が特徴となる。24は青磁碗である。口縁部が玉縁状を呈する。25～34は青花である。25～31は碗である。25は底部～体部下位で、見込には青海波と考えられる文様、外面には2条の円線が重なり合うように巡る。26・27は同一個体である。27は骨付付近まで釉を施す。高台外面には砂が熔着する。見込に1条の圓線と簡略化した文様を描き、呉須は暗色を呈する。28は口縁部外面に列点文と2条の界線、内面には1条の界線を施す。29は口縁部が外反する。外面は1条の界線、内面には四方擇文を施す。30は口縁部外面に2条の界線を、内面に1条の界線を施す。31は体部外面に縱位の文様を描く。「寿」か。33は底部付近に2条の圓線と十字花文を描く。34は甚簡底を呈すると考えられる皿である。口縁部外面に波瀬文帯と芭蕉葉文を描く。底部付近には2条の圓線が認められる。35は土製品である。器厚は薄く、完形は円盤状と考えられ表裏面ともに研磨された痕がみられる。36は磁石である。下端部は欠けているが、断面は逆三角形を呈する。



第20図 包含層出土遺物実測図

第1表 中世陶磁器観察表

No.	出土地点	種類	形態	断面	古墳・復原・文様ほか			名目	胎土	備考
					口径	底径	高さ	外	内	
1	E3	陶器	瓶	断面				国 SVH4-1	国 SVH4-1	縦目
2	E3	青磁	瓶	口底				国 SVH4-2	国 SVH4-2	縦目
3	E3	青磁	瓶	口縁部				国 SVH4-3	国 SVH4-3	縦目
4	E3	青磁	瓶	口縁部	(9.25)			国 SVH4-4	国 SVH4-4	縦目
5	E3	青磁	瓶	底部				国 SVH4-5	国 SVH4-5	縦目
6	T-11	陶器	瓶	断面				国 SVH4-6	国 SVH4-6	縦目
7	T-11	青磁	瓶	底部				国 SVH4-7	国 SVH4-7	縦目
8	T-14	青磁	瓶	底部				国 SVH4-8	国 SVH4-8	縦目
9	E3	土師器	甕	口底一致	9.00	3.80	(1.40)	ナデ 回転ヘラ切り	国 SVH4-9	国 SVH4-9
10	F3	土師器	甕	底部		3.50		ナデ 回転ヘラ切り	国 SVH4-10	国 SVH4-10
11	T-4	土師器	甕	底部				ナデ 回転ヘラ切り	国 SVH4-11	国 SVH4-11
12	E3	陶器	瓶	底部				回転ナデ	国 SVH4-12	縦目
13	E3	陶器	瓶	口底一致	4.9			回転ナデ	国 SVH4-13	縦目
14	F3	陶器	瓶	底部				回転ナデ	国 SVH4-14	縦目
15	F3	白磁	甕	口底一致	(11.6)	(6.40)	(2.70)	回転	国 SVH4-15	国 SVH4-15
16	E3	白磁	甕	口底一致				回転	国 SVH4-16	国 SVH4-16
17	F3	白磁	甕	底部		3.70		回転	国 SVH4-17	国 SVH4-17
18	T-4	白磁	甕	口底一致	(11.1)	(3.70)	(3.20)	回転	国 SVH4-18	国 SVH4-18
19	T-2	白磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-19	国 SVH4-19
20	F3	白磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-20	国 SVH4-20
21	F3	白磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-21	国 SVH4-21
22	F3	白磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-22	国 SVH4-22
23	F3	白磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-23	国 SVH4-23
24	F3	青磁	甕	口縁部				回転	国 SVH4-24	国 SVH4-24
25	E3	青磁	甕	口底一致	(4.80)			2条の円錐	国 SVH4-25	国 SVH4-25
26	F3	青磁	甕	口縁部				2条の円錐	国 SVH4-26	国 SVH4-26
27	E3	青磁	甕	底部		3.70		2条の円錐	国 SVH4-27	国 SVH4-27
28	F3	青磁	甕	口縁部				2条の円錐	国 SVH4-28	国 SVH4-28
29	F3	青磁	甕	口縁部				2条の円錐	国 SVH4-29	国 SVH4-29
30	F3	青磁	甕	口縁部				2条の円錐	国 SVH4-30	国 SVH4-30
31	F3	青磁	甕	底部				2条の円錐	国 SVH4-31	国 SVH4-31
32	F3	青磁	甕	底部				2条の円錐	国 SVH4-32	国 SVH4-32
33	F3	青磁	甕	底部				2条の円錐	国 SVH4-33	国 SVH4-33
34	F3	青磁	甕	口縁部				2条の円錐	国 SVH4-34	国 SVH4-34

第2表 中世土製品・石器計測表

No.	出土地点	種類	計測値				備考
			最大幅(cm)	最大幅(cm)	最大深(cm)	重量(g)	
35	E3	土製品	2.4	1.2	0.7	2.6	胎土 外 横幅19.2cm 内 に凹い場所19.5cm
36	E3	陶器	3.3	3.0	1.8	22.4	

### 第3節 近世～近代の遺構と遺物

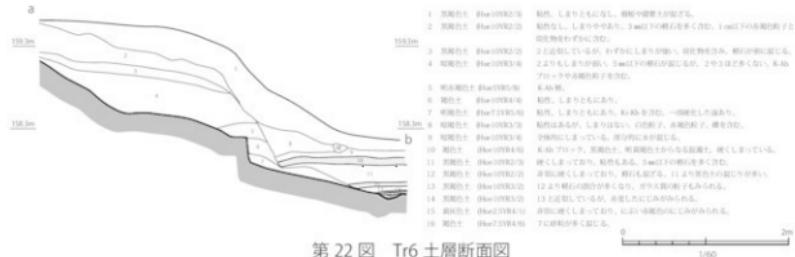
#### 3-1 遺構

##### (1) 8・9号道路状遺構 (SG8・9、第21・22図、図版3)

SG8・SG9は、それぞれ曲輪の東側と西側に位置し、中世の道路状遺構と同様のトレーンチ内で確認した。これらは、中世の道路跡を利用しながら道路幅を広げ、路面を作り出している。埋土はK-Ah、黒褐色土、明黄褐色土から構成される非常に硬くしまった褐色混潤土である。SG8は、標高約157.6mで中世の道路跡から向きを少し北向きにかえ、Tr10から曲輪部分にあたるTr2まで延びていることが確認された。現況では長さ約22m、最大幅約2.5m、硬化面の厚さ約0.15mを測り、曲輪の方に向けて傾斜が緩やかに上る。SG9は、標高約157.9m、現況での長さ約15m、幅約4m、硬化面の厚さ約0.12mで、中世の道路跡とほぼ同方向・同範囲で曲輪の縁辺に沿うように形成されている。土層断面観察により、曲輪の法面を切って道路幅を広げていたことが認められた。これらSG8・SG9は、調査区外へ延びているため全貌は明らかではない。しかし、現地形の様相からも曲輪の縁辺を沿うように互いが接続するものと考えられ、その全長は少なくとも56mを測ると推定される。遺物はSG8からは輪花皿が、SG9からは小片ではあるが薩摩系の陶器片が出土しており、遺構の時期とも合致している。



第21図 近世道路状遺構分布図



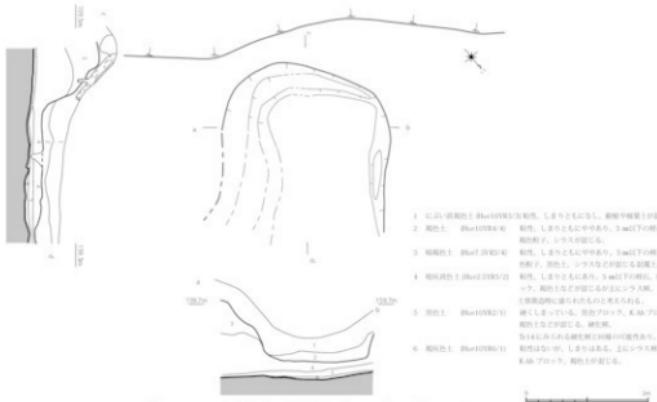
第22図 Tr6 土層断面図

## (2) 転塙状遺構 (第6・23図、図版4)

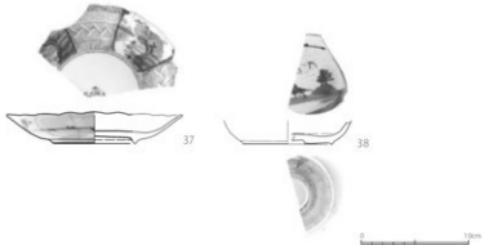
転塙状遺構は、標高約 159 m の C2 グリッドに位置する。中世時代に築造された土塙を利用し、その法面に掘り込む。軸は谷に向かう南西側に向け配置されている。北東側の形状は、樹木や切土の影響で全てを確認することはできなかったが、掘削範囲内での平面形は圓丸方形を呈し、上端の両軸約 3 m、下端の長軸約 2.6 m、短軸約 1.6 m、床面の面積は約 4.16m<sup>2</sup>を測る。壁面は約 50°で立ち上がり、床面と上端との比高差は最大で 0.97 m である。調査区外ではあるが、D3 グリッドでも今回調査したものよりやや大きめの規模をした転塙状遺構が 1 基確認されている。さらに、その中間地点では、同時期のものは不明であるが、土塙を築いていたシラス混じり層を掘り込んで暖をとっていた想像させるような炭化物の痕もみることができた。また、本遺構とは時期を異にするが、床面から約 20cm 下には、Tr14 で確認されたものと同様の黒色ブロックや K-Ah ブロックを含む 10cm 程度の硬化した層がみられた。遺構の形状や野尻町史にみられる西南の役の資料などからも、この遺構が転塙であった可能性は指摘できる。

## 3-2 遺物 (第24図)

37 は SG9 で出土した輪花皿である。窓絵には山水文を描き、窓絵の間は四方禪文と青海波で充填する。外面は草花文を施す。38 は SG11 から出土し、内面に風景を描き、蛇の目型高台を呈する。



第23図 墓壙状遺構実測図・土層断面図



第24図 近世道路状遺構出土遺物実測図

第3表 近世磁器観察表

No.	出土地点	種別	器種	部位	重量			手法/模様/文様ほか		色調		胎土	備考
					口幅	底径	壁高	内	外	内	外		
37	T-5	磁器	皿	口縁-底部	14.40	7.70	2.70	墨青花	白地墨青花	白地墨青花	白地墨青花	磁青	
38	T-13	磁器	皿	口縁-底部	8.20	5.80	1.80	墨青花	白地墨青花	白地墨青花	白地墨青花	磁青	

(第IV章 参考・引用文献)

宮崎県 1994 「宮崎県史 資料編 中古」

宮崎県 2000 「宮崎県史 通史編 下巻」

宮崎県 1999 「宮崎県史叢書 目向記」

下中川 1997 「日本歴史地名大系 46 宮崎県の地名」 平凡社

甲斐義典監修 2007 「國境 西諸・北諸の歴史」 郡士の版社

久留島典子 2001 「日本の歴史13 一段と朝鮮人名」 講談社

宮崎県埋蔵文化財センター 2012 「発掘記録」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 研究会

第210集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「本城跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 本貿易陶磁研究会

60 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「平山遺跡 D地点・E地点」 宮崎県埋蔵文化財センター 研究会

発掘調査報告書第160集

宮崎県埋蔵文化財センター 2001 「本城原遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告 曽我志郎 2000 「福前城」

書第34集

宮崎県西諸県郡野尻町教育委員会 1988 「祇園城跡」 野尻町文化財調査報告書第3集

宮崎県教育委員会 2013 「史跡 程佐城跡」 宮崎市文化財調査報告書第94集

都城市教育委員会 2009 「八幡城遺跡」 都城市文化財調査報告書第91集

都城市教育委員会 2010 「池之上城跡」 都城市文化財調査報告書第99集

小林市教育委員会 2011 「二原城跡1区・2区 宮地遺跡2区 宮地遺跡2区 奈佐木城遺跡」 小林市文化財調査報告書6集

上田秀夫 1982 「14-16世紀の青磁の分類について」 「貿易陶磁研究」 No.2 日本貿易陶磁

小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、器の分類とその年代」 「貿易陶磁研究」 No.2

第210集

森山恒 1982 「14-16世紀の白磁の形式分類と編年」 「貿易陶磁研究」 No.2 日本貿易陶磁

山本信夫 2000 「太宰府茶条跡XV-XVI世紀分類編」 太宰府市の文化財第49集

## 第IV章 総括

本章では、戸崎城跡発掘調査結果に加えて、文献史料等も含めて検討を加える。

### 第1節 文献史料からみる戸崎城跡

#### 1 「日向記」

江戸時代に入り、泰平の世になると、諸大名は競って自家の由緒や家譜を整備した。日向記とは、日向に由緒をもつ伊東氏が、江戸時代に、家譜を整備した成果により著されたものである。1次史料とはいえないが、中世の日向の歴史を紐解く上で、基本的な史料といえる。『宮崎県史 通史編』もこの史料に依拠している部分が多い。日向記はいくつかの同名異書もあり、原書についても行方を確認できないものもあるが、基本的に2つの系統に分類される。「山田ト翁本」と「山之城本」・「校合本」である。山田ト翁は伊東藩家老の山田宗武のことと思われ、上・中・下全13巻、宝永2年(1705年)に著したものである。県立図書館、宮崎県総合博物館、鹿児島県立図書館、東京大学史料編纂所に写本がある。「山之城本」・「校合本」は山之城本(故山之城民平氏所蔵本)の形式をもつもので、伊東家(予章館)に所蔵されていた校合本もこの系統に属している。どのような背景かは不明だが、藩主家によりト翁本による日向記の再編成を意図し、校合本作成を命じたものと推測され、少なくとも宝永2年(1705年)から文化2年(1805年)の間に成立したものと思われる。なお戦国時代に伊東氏と激しい対立関係にあつた鹿児島藩の史料「旧記雜錄」におさめられているものはこの「山之城本」と同種類である。

#### 2 「日向記」(山田ト翁本)による戸崎城に関する記述

##### ①「分國中城主摘要」(「日向記」卷第7)

永禄11年(1568年)、戸崎城主・肥田木四郎左衛門尉の記述があり、文末に「惣シテ分國四十八ヶ所ノ城主ナリ」とあり、この頃には、伊東四十八城が成立し、現在の宮崎県の大部分を支配下に置いていたものと考えられる。

##### ②「真幸口四ヶ所城捨事」(「日向記」卷第8)

元亀3年(1572年)、木崎原合戦において、伊東方が敗北し、伊東方の在地領主である須木城(現小林市須木)の米良美濃守が「直ニ三ツ山須木領ヲ捧テ鷹津(島津)兵庫頭被居シ真幸・飯野ヘ参陣」したことによって、「野尻ノ地頭福永丹後守ニ勢ヲ加テ野尻・戸崎ノ両城ヲ境ニシテ手堅ク番ヲセリ」とあるように野尻城と戸崎城が島津氏への防衛拠点になったことが記されている。

##### ③「依福永逆心没落事」(「日向記」卷第8)

天正5年(1577年)12月5日、福永丹後守は「薩摩勢ヲ野尻城へ引入ント定メテ」軍勢300余りを引き入れた。さらに翌8日には、「島津義久モ大軍ヲ引ツレ野尻ノ城ニ打入玉ヒケレハ、土崎(戸崎)ノ城モカヘヘ難ク陣屋ニ火ヲカケ山東ニ引退ク」ことになり、これを契機に伊東氏は「同九日ノアケボノニ佐土原ヲ捨玉フ」ことになり、現大分県の大友氏を頼って逃亡し、一気に没落することになる。

#### 3 戦国期の戸崎城及び野尻町一帯の総括

木崎原合戦後の事象を戦国時代の裏切りという視点だけで捉えると、当時の地域の様相や泰平の世へと移り変わる時代の様相などを見誤る。例えば、島津氏の場合は一族が多くの諸家に分立し、さらに入来院氏などの他氏が加わって互いに抗争し続けながらも、そこから脱却し、地域の核となって在地領主を従えていく姿が久留島典子氏によって指摘されている。

伊東四十八城が成立し、日向地域の支配を確立させた伊東氏と島津氏の軍事衝突、その後に一気に訪

れる隆盛と没落は決して特殊例ではない。むしろ全国的にこの動きが繰り返され、地域が統合されていくのであり、その背景には、軍事バランスの変化に敏感な在地領主が、より強力な戦国大名の支配に加わることによって、安定的な領地支配を意図するしたかな政治的判断が垣間見えるのである。

この後、戸崎城は耳川合戦後に鹿児島へ帰陣する島津義久を出迎える場になったり、豊臣秀吉の九州侵攻により、羽柴秀長が野尻城まで軍を進めた際に豊臣方の手中におさめられたりしており、軍事的な意味合いを持つ場合にのみ文献史料に登場している。江戸時代に入ると、一国一城令の影響もあり、戸崎城は廃城となった。以上のことから、戸崎城の性格は、戦乱期における防衛機能をもつ地理上の要地に設置された山城だが、近世の城のように地域の政治的な支配とその象徴としての役割をもつ城ではないということが指摘できる。戸崎城を含む野尻町一帯には、戦国時代の様相が色濃く表れた時期があり、その一端を今でも感じとることができる。

## 第2節 発掘調査成果からみる戸崎城跡

戸崎城跡の東、北、南の三方は険峻な崖によって隔てられた要害の地となり、自然の地形を巧みに組み入れて防衛機能を高めた城である。三方の守は強固であるのに比べ、西の守はやや脆弱であり、今回発掘調査によってわずかの範囲ではあるが西の守について確認することができた。

曲輪については、曲輪面の一部で埋め戻され、曲輪が拡張されていたことが確認できた。この拡張された部分の造成面下からは硬化した面も認められ、拡張以前、曲輪の縁辺を巡る道路状遺構とつながる曲輪内の連絡通路が存在していたと考えられる。この曲輪内の連絡通路は、上り勾配が約7.6度あることから、曲輪B3方面へ向けて延びていくものと考えられる。曲輪を分断する形で通路が延びていくのは、伊藤四十八城の一つとされる塩見城や穆佐城でも確認されている。しかし、通路を閉鎖して曲輪を拡張する造成が「島津氏の城構造」への改変か否かまでは明らかにすることはできなかった。

堀切は、曲輪Aと曲輪Bを大きく隔てる形で設けられていた。全長約60m、堀幅約16m、深さ約11mと大規模なものであり、特徴としては堀底を改變した跡が認められたことである。堀底東側法面の角度が約50°の薬研状に対し、改變された堀底は、推定約90°の薬研状であることから、防衛機能を高める必要性があったことがうかがえた。また、この堀切上部付近には、土壘が堀切に沿う形で曲輪B3西側端部全体に構築されていた。これらは、西側に続く台地と切り離す役割とともに、防衛面で最も重要なものとして存在していたのであろうと考えられる。

曲輪内の連絡通路閉鎖による曲輪面の拡張、堀底の改變、土壘の構築など防衛面での改変跡が多く確認されるなど、戸崎城は軍事的緊張により改変を必要とされていた可能性も考えなければならない。

出土遺物は、15世紀～16世紀の貿易陶磁を中心としたものが出土しており、遺跡を評価するうえで有効なものと考えられる。白磁皿は、体部が丸みを帯び緩やかに立ち上がるものの（15・17・18）や口縁部が外反するものの（15・17～22）など森田勉氏の分類によるところのE類群に相当する遺物が主体を占めている。青花は、碁笥底をもち口縁部がかるく内湾する（4・5・8・34）小野正敏氏の分類によるところの染付皿C群が出土している。その他、青磁碗や青花碗、備前系の徳利型瓶など同様な年代の資料が認められることから、この時代にかけて戸崎城は城として最も大きな役割を担っていたのではないだろうか。

今回は、限られた範囲内の発掘調査となったが、戸崎城の利用期間や防御性などといった機能面を確認できたことは、戸崎城の歴史を考える上で意味のある大きな成果ではないだろうか。

# 写 真 図 版



曲輪面(南東より)



Tr2土層断面(南東より)



Tr5土層断面(南東より)



Tr8土層断面(南より)



Tr9土層断面(南より)



曲輪C端部土層断面(南西より)



土塁土層断面(北より)



堀切東側全景(西より)



堀切東側上部土層断面(西より)



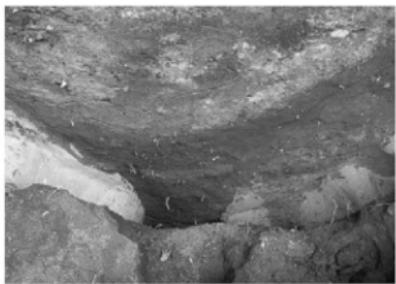
堀切東側下部土層断面(西より)



堀切西側土層断面(東より)



堀底土層断面1(北より)



堀底土層断面2(北より)



SG1完掘状況(南東より)



Tr10土層断面(東より)



Tr11土層断面(南東より)



SG2完掘状況(南より)



調査区北壁土層断面(北東より)



Tr14土層断面(南東より)



塹壕状遺構(北より)



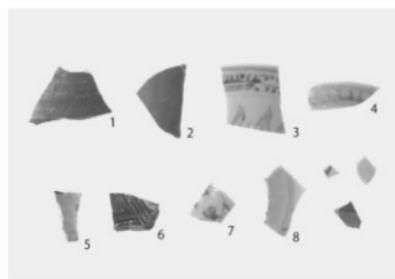
塹壕状遺構土層断面(北西より)



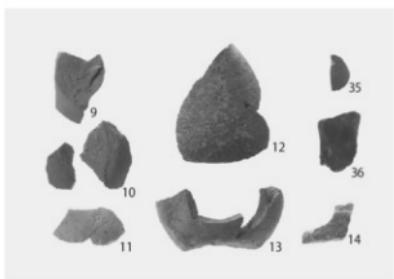
塹壕状遺構土層断面(南より)



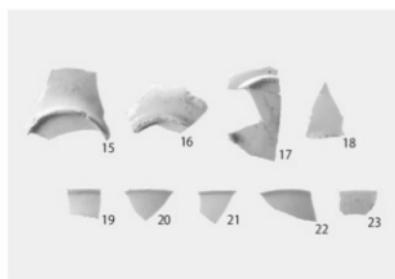
塹壕状遺構完掘状況(東より)



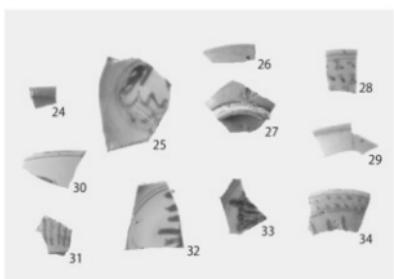
SG出土遺物



包含層出土遺物(陶器・土師器・土製品・砥石)



包含層出土遺物(白磁)



包含層出土遺物(青磁・青花)

## 報 告 書 抄 錄

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第235集

## 戸崎城跡

国道268号線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1172 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社 文昌堂

〒885-0052 都城市東町18街区1号

TEL 0986(36)6600 FAX 0986(36)4660

---